MONTHLY ORCHESTRA 5

読売日本交響楽団　月刊オーケストラ　2024年5月号　目次

5月の演奏会 2

5/19 横浜マチネーシリーズ

5/21 定期演奏会

5/25 土曜マチネーシリーズ

5/26 日曜マチネーシリーズ

5/31 名曲シリーズ

5月のマエストロ&アーティスト 5

5月の楽曲紹介 10

特集 **新・首席客演指揮者ヴァルチュハに大器の予感** 22
鈴木淳史

読響ニュース 26

日テレコーナー 放送予定 28

読響賛助会 29

読響メンバー 32

読響プロフィール 36

演奏をお楽しみいただくために

演奏中の写真撮影・録画・録音は固くお断りいたします。

携帯電話の電源、時計のアラームはお切りください。補聴器はしっかり装着してください。キーホルダーの鈴やアメの包み紙の音などにもご注意ください。

演奏中にプログラムをご覧になる際は、ページをめくる音にご配慮ください。

拍手はタクトが降ろされてから。消えゆく余韻は生演奏の醍醐味です。その貴重な時間を、ぜひご堪能ください。

※感染防止に配慮した運営を行う場合があります。

5/19 Sun.

第134回 横浜マチネーシリーズ
横浜みなとみらいホール　14時開演
YOKOHAMA MATINÉE SERIES No. 134 / Yokohama Minato Mirai Hall 14:00

5/21 Tue.

第638回 定期演奏会
サントリーホール　19時開演
SUBSCRIPTION CONCERT No. 638 / Suntory Hall 19:00

指揮
Principal Guest Conductor
ユライ・ヴァルチュハ（首席客演指揮者）–p.5
JURAJ VALČUHA

メゾ・ソプラノ
Mezzo Soprano
エリザベス・デション –p.7
ELIZABETH DESHONG

女声合唱
Women's Choir
国立音楽大学 –p.7
KUNITACHI COLLEGE OF MUSIC

合唱指揮
Chorusmaster
工藤俊幸
TOSHIYUKI KUDO

児童合唱
Children's Choir
東京少年少女合唱隊 –p.8
THE LITTLE SINGERS OF TOKYO

合唱指揮
Chorusmaster
長谷川久恵
HISAE HASEGAWA

コンサートマスター
Concertmaster
林 悠介
YUSUKE HAYASHI

マーラー
MAHLER
交響曲 第３番 ニ短調［約100分］–p.10
Symphony No. 3 in D minor
I. Kräftig. Entschieden
II. Tempo di Menuetto. Sehr mäßig. Ja nicht eilen!
III. Comodo. Scherzando. Ohne Hast.
IV. Sehr langsam. Misterioso. Durchaus *ppp*
V. Lustig im Tempo und keck im Ausdruck
VI. Langsam. Ruhevoll. Empfunden.

※本公演には休憩がございません。あらかじめご了承ください。
*No intermission

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術等総合支援事業（公演創造活動））
独立行政法人日本芸術文化振興会
協力：横浜みなとみらいホール（5/19）、アフラック生命保険株式会社（5/21）
※5/21公演では日本テレビの収録が行われます。

5/25 Sat.

第266回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール　14時開演
SATURDAY MATINÉE SERIES No. 266 / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

5/26 Sun.

第266回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール　14時開演
SUNDAY MATINÉE SERIES No. 266 / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

指揮
Principal Guest Conductor
ユライ・ヴァルチュハ（首席客演指揮者）–p.5
JURAJ VALČUHA

ヴァイオリン
Violin
周防亮介 –p.8
RYOSUKE SUHO

コンサートマスター
Concertmaster
長原幸太
KOTA NAGAHARA

リャードフ
LIADOV
魔法にかけられた湖 作品62［約６分］–p.15
The Enchanted Lake, op. 62

ハチャトゥリアン
KHACHATURIAN
ヴァイオリン協奏曲 ニ短調［約35分］–p.16
Violin Concerto in D minor
I. Allegro con fermezza
II. Andante sostenuto
III. Allegro vivace

［休憩］
[Intermission]

チャイコフスキー
TCHAIKOVSKY
交響曲 第6番 ロ短調 作品74〈悲愴〉［約46分］–p.17
Symphony No. 6 in B minor, op. 74 "Pathétique"
I. Adagio – Allegro non troppo
II. Allegro con grazia
III. Allegro molto vivace
IV. Finale : Adagio lamentoso

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術等総合支援事業（公演創造活動））
独立行政法人日本芸術文化振興会
共催：公益財団法人東京都歴史文化財団 東京芸術劇場

5/31 Fri.

第672回 名曲シリーズ
サントリーホール　19時開演
POPULAR SERIES No. 672 / Suntory Hall 19:00

指揮
Conductor
ステファニー・チルドレス *–p.6*
STEPHANIE CHILDRESS

チェロ
Cello
鳥羽咲音 *–p.9*
SAKURA TOBA

コンサートマスター
Guest Concertmaster
﨑谷直人（ゲスト）
NAOTO SAKIYA

シベリウス
SIBELIUS
交響詩〈フィンランディア〉 作品26［約8分］ *–p.18*
Finlandia, op. 26

エルガー
ELGAR
チェロ協奏曲 ホ短調 作品85［約30分］ *–p.19*
Cello Concerto in E minor, op. 85
I. Adagio – Moderato
II. Lento – Allegro molto
III. Adagio
IV. Allegro – Moderato – Allegro, ma non troppo – Poco più lento

［休憩］
[Intermission]

ドヴォルザーク
DVOŘÁK
交響曲 第9番 ホ短調 作品95 **〈新世界から〉**
［約40分］ *–p.20*
Symphony No. 9 in E minor, op. 95 "From the New World"
I. Adagio – Allegro molto
II. Largo
III. Molto vivace
IV. Allegro con fuoco

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術等総合支援事業（公演創造活動））
独立行政法人日本芸術文化振興会

指揮
ユライ・ヴァルチュハ
（首席客演指揮者）
JURAJ VALČUHA, Principal Guest Conductor

新・首席客演指揮者
ヴァルチュハ、始動。

© 読響

欧米で躍進を続け、4月に新たな首席客演指揮者に就任した鬼才。マーラーの交響曲第3番と、得意のロシア・ソビエト音楽を披露し、その手腕を発揮する。

1976年チェコ・スロヴァキア（当時）のブラチスラヴァ生まれ。母国で作曲と指揮を学んだ後、サンクトペテルブルク音楽院とパリ国立高等音楽院で学び、ムーシンらに師事した。フランス国立管デビューを皮切りに、欧米で活躍。2009年から16年までRAI国立響の首席指揮者を務め、ウィーン、ベルリン、デュッセルドルフなどへのツアーでも成功を収めた。16年から22年までナポリ・サン・カルロ劇場の音楽監督を務め、同劇場の水準を高めた手腕が高く評価された。17年からベルリン・コンツェルトハウス管の首席客演指揮者を、22年からヒューストン響の音楽監督を務めている。

これまでにベルリン・フィル、ロイヤル・コンセルトヘボウ管、ドレスデン国立歌劇場管、ニューヨーク・フィル、ウィーン響、フィルハーモニア管、ミュンヘン・フィル、ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管、チェコ・フィルなどに客演し、古典派から現代作品まで幅広いレパートリーを振り活躍している。オペラでは、バイエルン国立歌劇場で〈蝶々夫人〉、ベルリン・ドイツ・オペラで〈エレクトラ〉、ボローニャ歌劇場で〈サロメ〉、フェニーチェ劇場で〈ピーター・グライムズ〉などを指揮。今シーズンは、5月にローマ歌劇場で〈イェヌーファ〉を、6〜7月にベルリン・ドイツ・オペラで〈トリスタンとイゾルデ〉を振る。読響とは22年8月以来、2度目の共演。

5/31 名曲

Maestro

指揮

ステファニー・チルドレス

STEPHANIE CHILDRESS, Conductor

溢れ出る想像力
新星チルドレスが
名曲に魂を込める

©Kaupo Kikkas

頭脳明晰かつエネルギッシュな指揮で注目を浴びる若手女性指揮者チルドレスが、〈新世界〉などの名曲を振り、鮮烈な日本デビューを果たす。

1999年ロンドン生まれ。幼少期よりヴァイオリンを始め、ヴァイオリニストとして活動。セント・ジョンズ・カレッジ（ケンブリッジ大学）で音楽を専攻し、指揮者としての活動を開始。2020年にパリで開催されたコンクール「ラ・マエストラ」で第2位を受賞し、一躍脚光を浴びる。以降、世界各地の著名楽団に客演しており、ロンドン響、クリーヴランド管、ベルリン・コンツェルトハウス管、パリ管、ドレスデン・フィル、ロイヤル・フィル、フィルハーモニア管、デトロイト響、ポーランド国立放送響などを指揮。またノースカロライナ響には、定期的に客演している。24/25年シーズンからは、これまでも度々共演してきたバルセロナ響の首席客演指揮者に就任する。

オペラでも活躍の場を広げており、22年11〜12月にかけてグラインドボーン・ツアーで〈フィガロの結婚〉を、23年10月にはハンブルク州立歌劇場で〈後宮からの誘拐〉を指揮。23年12月には、グラインドボーンに再登場し〈ドン・ジョヴァンニ〉を振り、24年4月にはデトロイト・オペラで1980年生まれの注目の作曲家ミッシー・マッツォーリの〈奇跡の海〉を指揮し、好評を博した。

音楽の役割を世界に広めることへの信念を持ち、フランスとイギリスの協力関係を強化する「フランス＝英国若手リーダープログラム」のメンバーなど、様々な活動にも参加している。

5/19 横浜マチネー

5/21 定期

Artist

©Kristin Hoebermann

メゾ・ソプラノ

エリザベス・デション

ELIZABETH DESHONG, Mezzo Soprano

ステージ上の存在感、深い美声で世界を魅了するディーヴァ。1981年米ペンシルベニア州生まれ。米オバーリン音楽院で声楽を学ぶ。2010年にワシントン・ナショナル・オペラでの〈ナクソス島のアリアドネ〉作曲家の役で「最優秀アーティスト賞」を受賞以降、英国ロイヤル・オペラ、メトロポリタン歌劇場、ウィーン国立歌劇場、サンフランシスコ・オペラなどで活躍。高度な技術が必要な〈セビリアの理髪師〉のロジーナや〈ノルマ〉のアダルジーザから、〈蝶々夫人〉のスズキや〈ラインの黄金〉のフリッカまで幅広い役柄を得意とする。トロント響とのヘンデル〈メサイア〉が18年のグラミー賞にノミネートされたほか、クリーヴランド管、シカゴ響などと共演するなどコンサートでも活躍。読響初登場。

5/19 横浜マチネー

5/21 定期

Artist

女声合唱

国立音楽大学

KUNITACHI COLLEGE OF MUSIC, Women's Choir

国立音楽大学は1926年創立の東京高等音楽学院を前身とし、声楽科からは第一線で活躍する歌手を数多く輩出してきた。翌年に新交響楽団（N響の前身）と初共演。近年では、2011年に東京フィルとマーラー〈復活〉、16年にメータ指揮でウィーン・フィルとベートーヴェン〈第九〉、18年には東京芸術劇場コンサートオペラ〈真珠とり〉に出演し、高い評価を受けた。読響とは、2000年以降だけでも、04年にヤナーチェク〈グラゴール・ミサ〉、06年にモーツァルト〈レクイエム〉、08年にマーラー〈復活〉、09年にホルスト〈惑星〉、東京芸術劇場×石川県立音楽堂共同制作シアターオペラ〈トゥーランドット〉、14年にドヴォルザーク〈レクイエム〉など、多数の共演を果たしている。

5/19 横浜マチネー

5/21 定期

Artist

児童合唱

東京少年少女合唱隊

THE LITTLE SINGERS OF TOKYO, Children's Choir

ヨーロッパの伝統音楽に基づく音楽教育を目的とする日本初の本格派合唱団として1951年設立。6歳から基礎を学び、演奏活動の中核を担う15歳から19歳までのコンサートコアに加え、室内合唱のカンマーコアまで幅広い演奏活動を行う。グレゴリオ聖歌から現代作品までレパートリーは幅広く、同声から混声の合唱作品までをカバーする。松平頼暁、一柳慧、細川俊夫などへの委嘱作品も多く手掛ける。年2回の定期公演の他、64年の訪米以来、海外公演は34回を数える。国内外のオーケストラ、オペラ劇場との共演も多く、アバド、ムーティ、ルイージらとも共演して高い評価を得た。2021年に創立70周年を迎え、連続演奏会「70周年記念コンサートシリーズ2021–2023」を開催した。読響とは度々共演し、好評を博している。

5/25 土曜マチネー

5/26 日曜マチネー

Artist

2016年ヴィエニャフスキ国際コンクール入賞の新鋭ヴァイオリニスト。日本音楽コンクールやオイストラフ国際コンクールなど数々のコンクールで優勝や入賞の実績を持つ。出光音楽賞、青山音楽新人賞を受賞。12歳での日本の主要楽団との共演以来、パリ管、フランス国立管、シュトゥットガルト室内管など国内外の楽団と多数共演。23年にはサントリーホールで「無伴奏リサイタル」を開催し、絶賛された。東京音楽大学アーティスト・ディプロマコース修了後、江副記念リクルート財団奨学生としてスイスのメニューイン国際音楽アカデミーに留学。テレビ朝日「題名のない音楽会」、NHK-FM「リサイタル・ノヴァ」などにも多数出演。使用楽器は宗次コレクションより貸与された1678年製ニコロ・アマティ。

©JUNiCHIRO MATSUO

ヴァイオリン

周防亮介

RYOSUKE SUHO, Violin

©Julia Wesely

チェロ

鳥羽咲音

SAKURA TOBA, Cello

類稀（たぐいまれ）な音楽性を持つ新星チェリスト。2005年ウィーン生まれ。6歳から毛利伯郎に師事。国内外のコンクールで優勝・入賞し、注目を浴びる。2019年に日本フィルと共演以降、群馬響などと共演。20年にNHK-FM「リサイタル・パッシオ」に、22年に東京・春・音楽祭に出演。23年8月には、読響サマーフェスティバル《三大協奏曲》に出演し、「驚異の才能」と絶賛された。服部真二音楽賞を受賞。江副記念リクルート財団第50回（21年）奨学生および公益財団法人ロームミュージックファンデーション21、22年度奨学生。22年よりベルリン芸術大学でJ-P. マインツに師事。使用楽器はアンネ＝ゾフィー・ムター財団より貸与された1840年製のジャン＝バティスト・ヴィヨーム。

5/31 名曲

Artist

マーラー
交響曲 第３番 ニ短調

近代の交響曲の基本形は、古典派のヨーゼフ・ハイドン（1732〜1809）の創作によって定着をみたとされる。すなわち、4つの楽章からなり、それぞれ第1楽章＝速い、第2楽章＝遅い、第3楽章＝舞曲系（メヌエット、スケルツォなど）、第4楽章＝速いという構成をとる。後期ロマン派のアントン・ブルックナー（1824〜96）あたりでも、この線を守っているだろう。

そこへゆくと、グスタフ・マーラー（1860〜1911）の交響曲第3番は破天荒というほかない。全部で6つも楽章がある。第1楽章は35分と長大で、これだけで「第1部」をなす。残りの楽章全部が「第2部」。最終楽章はゆっくりゆったりと、こちらも20分以上かかる。楽器編成も大規模で、一部声楽も加わり多彩だ。

なぜこのようなものが現れたのか？　これには、理念の表明という観点からみるのがよい。音楽にあっても、「いかに書くか」という以上に、「何を伝えるか」を重視する行き方が出てきたのだ。「詩的理念」をもとに作曲したフランツ・リスト（1811〜86）などから発展したライン。哲学に親しんだマーラー個人の資質というのもあるだろう。

本作の理念は、ずばり「自然」である。ただし、1896年の、マーラーの次の発言に注意されたい。「いつも奇妙に思うのですが、人は“自然”というと、たいてい花や鳥や森の空気のことしか考えません。ディオニュソス神のことを、あの牧神のことを、誰も知らないのです」。古代ギリシアのディオニュソス神を、マーラーは明らかに――哲学者ニーチェにならって――全自然・全生命の根源ととらえているのである。そして交響曲第3番の第1楽章を、作曲の最終段階で「牧神は目覚める／夏が行進してくる（バッコスの行進）」と呼んだ。バッコスは、そう、ディオニュソスの異名である。

この後に続く各楽章に与えられた標題も挙げておけば、「野の花が私に語ること」、「森の生き物たちが私に語ること」、「人間が私に語ること」、「天使たちが私に語ること」、「愛が私に語ること」となる。第6楽章にいう「愛」とは、マーラーによれば、何人（なんぴと）をも見捨てない神の慈愛のことだという。

こうしてみると、この交響曲が、原生命から始まって進化論的に人間にまでたどりつき、ついには至高の神をうたうものであることが分かってくる。

ところがマーラーはこれら標題を、出版の段になって取り下げてしまった。理念たる自然＝宇宙を「描写」した音楽と取られたくなかったのか。彼の音楽は、いわば理念そのものだったのだ。

第1楽章「力強く、決然と」　8本のホルンが冒頭で吹く旋律は、当時の自由主義的な若者たちの間でよく知られた学生歌にもとづく。行進曲調も目立ち、そうした社会的「闘争」の身ぶりが、「自然の目覚め」や「夏の嵐」の音楽と交差するのが特徴。

第2楽章「メヌエットのテンポで、つとめて中庸に、そう、急がずに！」　典雅な踊りメヌエットの部と、急速で諧謔（かいぎゃく）的なスケルツォの部が交代する。

第3楽章「寛（くつろ）いで、スケルツァンド、慌てずに」「カッコウが死んだらナイチンゲールの番さ」という内容の自作の歌曲〈夏季交代〉を転用。ほかの素材も加わり、鳥の声がしきりと聞こえる。遠方からは郷愁をさそうポストホルン（郵便馬車のラッパ）も。

第4楽章「非常に遅く、神秘的に、一貫してピアニッシシモで」　ニーチェ著『ツァラトゥストラはかく語りき』からとられた詩を、アルト独唱が歌う。「だがあらゆる快（よろこ）びは永遠を求める」の旋律は、第1楽章にあったもの。

第5楽章「テンポは愉（たの）しげに、表情は悪戯（いたずら）っぽく」　民謡集『少年の不思議な角笛』所収の詩をアルト独唱と児童＆女声合唱が歌う。ペテロは、イエスを知らないと偽証したイエスの弟子。

第6楽章「遅く、静かさを湛（たた）えて、感じて」　前楽章から間を置かず、慈愛に満ちた弦楽合奏で始まる。二つの主たる音楽素材が変奏されて進行。第1楽章の不穏な回想も。総譜の最後1ページには、「力任せにではなく、たっぷりとした高貴な音で」との指示がある。

〈舩木篤也 音楽評論〉

作曲：1893〜96年／初演：1902年6月9日、クレーフェルト（ドイツ）／演奏時間：約100分
楽器編成／フルート4（ピッコロ持替）、オーボエ4（イングリッシュ・ホルン持替）、クラリネット3（バスクラリネット持替）、エスクラリネット2（クラリネット持替）、ファゴット4（コントラファゴット持替）、ホルン8、トランペット4、トロンボーン4、チューバ、ティンパニ2、打楽器（大太鼓、小太鼓、シンバル、サスペンデッド・シンバル、トライアングル、タンブリン、グロッケンシュピール、銅鑼、鐘、ルーテ）、バンダ（ポストホルン、小太鼓）、ハープ2、弦五部、女声合唱、児童合唱、独唱メゾ・ソプラノ

マーラー　交響曲 第３番　歌詞対訳

訳：舩木篤也

4. Zarathustras Mitternachtslied

Friedrich Nietzsche, from „Also sprach Zarathustra“

O Mensch!
Gib acht!
Was spricht, die tiefe Mitternacht?
„Ich schlief, ich schlief -,
Aus tiefem Traum bin ich erwacht: -
Die Welt ist tief,
Und tiefer als der Tag gedacht.“

O Mensch!
„Tief ,
tief ist ihr Weh -,
Lust - tiefer noch als Herzeleid:

Weh spricht: Vergeh!
Doch alle Lust will Ewigkeit -,
- will tiefe, tiefe Ewigkeit!“

第４楽章　ツァラトゥストラの真夜中の歌

フリードリヒ・ニーチェ『ツァラトゥストラはかく語りき』より

おお人間よ！
よく聞け！
深い真夜中は何を語っているか？
「私は昏々と眠っていた
深い夢から私はいま目覚めた
この世は深い
昼が考えた以上に深い！」

おお人間よ！
「深い　深いのだ！
この世の痛みは深い
快びは――快びは心の奥底の苦しみよりも深い
痛みは言う　消え去れ！ と
だがあらゆる快びは永遠を求める
深い　深い永遠を求める！」

5. Armer Kinder Bettlerlied

Achim von Arnim & Clemens Brentano, from „Des Knaben Wunderhorn“

Chor:
Bimm bamm, bimm, bamm, ...

Es sungen drei Engel einen süßen Gesang,
Mit Freuden es selig in dem Himmel klang.
Sie jauchzten fröhlich auch dabei,

Daß Petrus sei von Sünden frei.

Und als der Herr Jesus zu Tische saß,
Mit seinen zwölf Jüngern das Abendmahl aß,

第５楽章　哀れな子らのもの乞う唄

アヒム・フォン・アルニム＆クレメンス・ブレンターノ『少年の不思議な角笛』より

合唱
びむ　ばむ　びむ　ばむ…

あるとき三人の天使が　愛らしい歌をうたっておりました
いかにも嬉しそうに　それは天上で浄らかな響きをふりまいていました
天使たちは愉しげに　歓びの声をあげて言いました
「ペテロの罪は晴れたよ！」

そう　イエスさまが食卓にお着きになり
十二人の弟子たちと最後の晩餐をおとりになっていたときのこと

Da sprach der Herr Jesus: „Was stehst du denn hier?
Wenn ich dich anseh', so weinest du mir.“

Alt:
„Und sollt' ich nicht weinen, du gütiger Gott“

Chor:
Du sollst ja nicht weinen!

Alt:
„Ich hab übertreten die zehn Gebot;
Ich gehe und weine ja bitterlich“

Chor:
Du sollst ja nicht weinen!

Alt:
„Ach komm und erbarme dich über mich.“

Chor:
Bimm bamm, bimm, bamm, ...

„Hast du denn übertreten die zehen Gebot,
So fall auf die Knie und bete zu Gott!
Liebe nur Gott in alle Zeit,

So wirst du erlangen die himmlische Freud'.“

Die himmlische Freud', die Selige Stadt;
Die himmlische Freud', die kein Ende mehr hat.
Die himmlische Freude war Petro bereit't,
Durch Jesum und allen zur Seligkeit.

Bimm bamm, bimm, bamm, ...

イエスさまはこう言われました「そこでいったい何をしておる？
私と目があうと泣いたりして！」

アルト独唱
「泣くでないと仰るのですか　こころ優しい神さま」

合唱
汝、泣くべからず　汝、泣くべからず

アルト独唱
「おいらはあの十戒を　破ったのでございます
『ペテロは行ってひどく泣く』のでございます」

合唱
汝、泣くべからず　汝、泣くべからず

アルト独唱
「どうかお願いです　おいらを憐れんでください！」

合唱
びむ　ばむ　びむ　ばむ…

「十戒を破ったのなら
ひざまずいてな　神さまに向かって祈れ
いつでも　ひたすらに神さまをお慕い申し上げることだ
そうすればおまえも　天上の喜びを手にすることだろう」

天上の喜び　それは浄福の都
天上の喜び　それは尽きることを知らない
天上の喜び　それはペテロにも与えられていた！
清らかな幸あれと　イエスさまはそれを皆にお与えになったのです

びむ　ばむ　びむ　ばむ…

5/19 横浜マチネー
5/21 定期
Program Notes

リャードフ
魔法にかけられた湖 作品62

アナトーリ・リャードフ（1855〜1914）は、民謡や民話に根ざした作風で、ロシア五人組の後継者的な存在となった作曲家。生地のサンクトペテルブルク音楽院でリムスキー＝コルサコフに学んだ彼は、1878年から母校で教鞭をとりながら創作や指揮活動を行い、内外の名作の紹介、ロシア民謡の収集、プロコフィエフら有力作曲家の育成にも尽力した。

長い作品を書く根気がなく、ロシア・バレエ団のディアギレフから〈火の鳥〉の音楽を依頼されながら着手しなかったため、ストラヴィンスキーに乗り換えられたとの逸話で知られるリャードフだが、「音の細密画家」と呼ばれ、精緻・精妙な小品では無類の才能を発揮した。本作は、〈バーバ・ヤガー〉、〈キキモラ〉と並ぶその代表例である。

リャードフは、音楽院卒業直後の1878年、オペラ〈シンデレラ〉の創作にとりかかった。だが、10年以上経（た）っても完成できず、結局は放棄。のちにその中の素材を用いた小品を二つ完成させた。一つは〈キキモラ〉で、もう一つが本作。おもに1908年という晩年近い時期に作曲され、1909年2月、ニコライ・チェレプニンの指揮により初演された。

この曲は、オペラ中のルサルカを描写した場面の楽想が用いられているともいわれる。ドヴォルザークのオペラで知られるルサルカは、スラヴ民話に出てくる水の精で、若い男性を魅了して水の中に引きずり込むといった魔力を持っている。

曲（アンダンテ、8分の12拍子）は、さざ波のような弦楽器やハープを中心に進み、随時管楽器が絡みながら強弱の変化を繰り返していく。ただし、静けさに包まれた神秘的な秘境の湖といった風情は、終始変わらない。すなわち、小波に揺れる湖が、師リムスキー＝コルサコフ譲りの色彩的かつ緻密な管弦楽法と印象派風の手法で描かれた、美しく幻想的な音楽であり、時にワーグナーの〈トリスタンとイゾルデ〉を想起させもする。

〈柴田克彦 音楽ライター〉

作曲：1908〜09年／初演：1909年2月21日、サンクトペテルブルク／演奏時間：約6分
楽器編成／フルート3、オーボエ2、クラリネット3、ファゴット2、ホルン4、ティンパニ、打楽器（大太鼓）、ハープ、チェレスタ、弦五部

ハチャトゥリアン
ヴァイオリン協奏曲 ニ短調

旧ソビエト連邦の代表的作曲家アラム・ハチャトゥリアン（1903〜78）は、バレエ音楽〈ガイーヌ〉〈スパルタクス〉等、激しいリズムと原色的なサウンドを持った管弦楽曲で知られるが、ピアノ、ヴァイオリン、チェロのための協奏曲も1曲ずつ残している。これらは、民族音楽の要素と古典的な協奏曲形式を巧みに融合させた作品で、20世紀の各形態における重要レパートリーとなっている。

中でもヴァイオリン協奏曲はハチャトゥリアンの代表作のひとつ。1940年に作曲され、同年ダヴィド・オイストラフの独奏で初演された。そして、プロコフィエフやショスタコーヴィチ等の著名音楽家が大挙列席したこの初演で大成功を収め、作曲者の名を世界に広めることとなった。

本作は、ソ連きっての大ヴァイオリニスト、オイストラフの助言を得て書かれ、彼に献呈された。またオイストラフは独自のカデンツァも創作。これは、作曲者から「私が書いたものよりずっといい」と絶賛され、実演でも多くの奏者が弾くようになった。なお、68年に名奏者ランパルがフルート協奏曲に編曲し、その形でもしばしば演奏されている。

曲は、アルメニアの民俗的な色彩の濃い、ヴァイタリティに溢（あふ）れた音楽。形的にはソナタ形式→三部形式→ロンド形式と続く古典的な協奏曲様式に則（のっと）っており、主要主題はすべてヴァイオリン独奏で提示される。

第1楽章　アレグロ・コン・フェルメッツァ（「しっかりと、はっきりと」の意）　エネルギッシュな開始楽章。最初に独奏ヴァイオリンがG線で奏でる野性的な第1主題と、歌謡的な第2主題を中心に進行する。

第2楽章　アンダンテ・ソステヌート　哀愁に満ちた主題を中心に運ばれる緩徐楽章。東洋的な中間部が挟まれる。

第3楽章　アレグロ・ヴィヴァーチェ　躍動的な主題を軸にした民俗舞曲風の終曲。3つの副主題が挟まれ、第1楽章第2主題の再現が印象を強める。〈柴田克彦 音楽ライター〉

作曲：1940年／初演：1940年11月16日、モスクワ／演奏時間：約35分
楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、小太鼓、サスペンデット・シンバル、タンブリン）、ハープ、弦五部、独奏ヴァイオリン

チャイコフスキー
交響曲 第6番 ロ短調 作品74〈悲愴〉

ロシアの大家ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー（1840〜93）最後の大曲にして、古今の交響曲の中でも上位の人気を誇る1曲。1892年末に着想後、93年に入って本格的に着手され、同年8月末に完成。10月28日、作曲者の指揮によりサンクトペテルブルクで初演された。ところが彼は11月2日にコレラを発症し、4日後の6日に世を去った。

こうした経緯とアダージョ・ラメントーソ（悲しく、悼んで）のフィナーレに象徴される曲の悲劇性が相まって、「死を予感した作品」や「自殺に至った作品」との見方がなされることになり、20世紀後半にはある音楽学者が出した「同性愛醜聞の隠匿のため、秘密会議にて自殺を強要された」との見解が定説になりかけたこともある（現在、死因は病気説が主流）。

曲自体はやはり悲愴感が強く、特にフェルマータの付いた休符で消えていく終結は、人生の最期を想起させなくもない。ただし、当時の交響曲では異例の第4楽章のみならず、曲調が激変する第1楽章、珍しい5/4拍子のワルツの第2楽章、南イタリアの舞曲タランテラのリズムを用いて、スケルツォと行進曲を合体させた第3楽章……と全楽章がユニークな特徴を備えており、見方を変えれば、新機軸を全面的に打ち出した意欲作ともいえる。

第1楽章　アダージョ〜アレグロ・ノン・トロッポ　暗鬱（あんうつ）な序奏から、ヴィオラとチェロが第1主題を奏する主部へ移り、激しさを増した後、甘美な第2主題が登場。激烈な爆発に始まる展開部を経て、静かに終結する。

第2楽章　アレグロ・コン・グラツィア　変則的なワルツ。2＋3拍子の不安定感もあって、どこか暗い影を宿している。

第3楽章　アレグロ・モルト・ヴィヴァーチェ　細かな動きに始まり、ダイナミックな行進曲となって高揚を続ける。

第4楽章　フィナーレ、アダージョ・ラメントーソ　悲痛な主題を中心とした終曲。中間部は陶酔的でもある。

〈柴田克彦 音楽ライター〉

作曲：1893年／初演：1893年10月28日（ロシア暦16日）、サンクトペテルブルク／演奏時間：約46分
楽器編成／フルート3（ピッコロ持替）、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、シンバル、銅鑼）、弦五部

シベリウス
交響詩〈フィンランディア〉作品26

交響詩〈フィンランディア〉は、ジャン・シベリウス（1865〜1957）の作品でもっともよく知られるばかりでなく、フィンランドのシンボルといえるような楽曲である。曲はまず、1899年に上演された歴史劇の最後の場面「フィンランドは目覚める」の付随音楽として発表された。劇のテーマは、ロシアの圧政に抵抗するフィンランドとその輝かしい未来。当時、フィンランドはロシア皇帝ニコライ2世を大公として戴（いただ）く「フィンランド大公国」であり、人々の間ではロシアの強権的な支配から逃れるべく、国家の真の独立を望む機運が高まっていた。劇は観客に熱狂的に迎え入れられた。

翌年、シベリウスはパリ万国博覧会に招かれたヘルシンキ・フィルのために、曲を単独の交響詩に改訂した。シベリウスは後にパトロンとなるアクセル・カルペランの手紙による提案を受け入れて、曲名を〈フィンランディア〉（フィンランド頌）と定める。しかし万国博覧会での演奏に際して添えられた曲名は「スオミ」（フィンランドの意）。この時点ではロシアの検閲を逃れるために、愛国的な性格を隠す必要があった。博覧会直後も「祖国」、あるいは「即興曲」といった題が用いられることがあった。

曲は重々しい金管楽器の強奏によって開始される。ティンパニのトレモロが悲劇的なムードを高める。木管楽器、弦楽器も加わって決然とした楽想が続いた後、やがてリズミカルで勇壮な曲調に転じる。シンバルがにぎやかに打ち鳴らされ、力強く高揚する。続いて木管楽器がやさしく伸びやかな賛歌を奏で、これを弦楽器が受け継ぐ。この主題は「フィンランディア賛歌」として、シベリウス自身による合唱用編曲でも親しまれ、「フィンランド第二の国歌」とも呼ばれる。ふたたび勇壮な曲調が帰ると、賛歌の主題を交えながら祝祭感あふれる終結部を迎える。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1899年、1900年改訂／初演：1899年11月4日、ヘルシンキ、1900年7月2日、ヘルシンキ（改訂稿）／演奏時間：約8分
楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、シンバル、トライアングル）、弦五部

エルガー
チェロ協奏曲 ホ短調 作品85

今でこそドヴォルザークと双璧をなすチェロ協奏曲の傑作として名高い本作品であるが、1919年、ロンドン交響楽団のシーズン開幕公演で行われた初演は惨憺（さんたん）たる結果に終わった。独奏者は作曲者エドワード・エルガー（1857〜1934）が信頼を寄せるフェリックス・サモンド。この公演ではチェロ協奏曲のみをエルガーが指揮し、ほかの曲ではアルバート・コーツが指揮を担った。だが、コーツがリハーサルを予定より大幅に長引かせたため、エルガーにはわずかな時間しか与えられなかった。チェロ協奏曲は準備不足のまま演奏され、著名な批評家に「この偉大なオーケストラがこれほど嘆かわしい姿をさらしたことはない」と書かれた。

初演時のオーケストラにはジョン・バルビローリがチェロ奏者として参加していた。後に指揮者に転向したバルビローリは、1965年にジャクリーヌ・デュ・プレの独奏でロンドン交響楽団を指揮して同曲を録音した。この録音がセンセーショナルな成功を収めたことで、作品の真価が広く知られることになった。

チェロ協奏曲はエルガーにとって最後の大曲となった。作品を包み込む深い憂愁の背景には、自身の健康問題や最愛のアリス夫人の衰えがあったにちがいない。あるいはこの曲は第一次世界大戦から生まれたレクイエムだったのかもしれない。

第1楽章　アダージョ〜モデラート　独奏チェロによる荘重な導入部で幕を開け、ヴィオラのたゆたうような主題が主部を導く。切れ目なく第2楽章へ。

第2楽章　レント〜アレグロ・モルト　囁（ささや）くように開始される無窮動（むきゅうどう）風の楽章。

第3楽章　アダージョ　思索にふけるかのような短い緩徐楽章。孤独な無言歌。

第4楽章　アレグロ〜モデラート〜アレグロ・マ・ノン・トロッポ　重々しい独奏チェロのモノローグに続いて、闘争的な楽想がくりひろげられる。第3楽章の主題と第1楽章冒頭主題を回想して、力強く曲を閉じる。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1918〜19年／初演：1919年10月27日、ロンドン／演奏時間：約30分
楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、弦五部、独奏チェロ

ドヴォルザーク
交響曲 第９番 ホ短調 作品95〈新世界から〉

「新世界」とはアメリカのこと。チェコの作曲家アントニン・ドヴォルザーク（1841〜1904）にとって、アメリカははるか彼方の異国である。ジェット機が飛び交う現代とは異なり、19世紀末にヨーロッパからアメリカに渡るには船による長旅が必要だった。この曲は、はるばるたどり着いた新世界から故郷に向けた一種の音の便りとでも言えるだろう。

ドヴォルザークがアメリカに渡ったのは、ニューヨークに設立されたナショナル音楽院の院長に就任するためだった。1891年、裕福な実業家の夫を持つジャネット・サーバーは、本格的な音楽院をアメリカに設立すべく、すでに国際的な名声を築いていたドヴォルザークに院長への就任を依頼した。当初、ドヴォルザークはこのオファーを断っていたが、サーバー夫人からの粘り強い説得と桁外れの高額報酬に心を動かされ、渡米を受諾する。ドヴォルザークはアメリカの黒人霊歌や先住民の音楽から新たな刺激を受け、新世界で受けたインスピレーションと祖国への望郷の念を交響曲第９番〈新世界から〉へと結実させた。

第1楽章　アダージョ〜アレグロ・モルト　ゆったりとした序奏から、緊迫感みなぎる主部へと続く。勇ましく推進力あふれる楽想がくりひろげられる。

第2楽章　ラルゴ　イングリッシュ・ホルンによる郷愁を誘うメロディは「遠き山に日は落ちて」あるいは「家路」の題で広く親しまれている。

第3楽章　モルト・ヴィヴァーチェ　エネルギッシュな民俗舞曲風のスケルツォ。中間部はひなびた民謡風。

第4楽章　アレグロ・コン・フオーコ　あたかも機関車が徐々に速度をあげて爆走するかのような開始部は、大の鉄道ファンだった作曲者ならでは。壮大なクライマックスを築くが、消え入るような最後の一音が余韻を残す。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1893年／初演：1893年12月16日、ニューヨーク／演奏時間：約40分
楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（シンバル、トライアングル）、弦五部